作品タイトル

母と旅と

著者名

星宮ななえ

あらすじ

僕にとって旅行は日常だったけれど、旅行好きの母と過ごした時間は特別だった。大好きな母との旅は刺激的でとても楽しい。だけど世間はそれを許してはくれない。母は僕たちのもとを去る。悲しいはずなのにどこかほっとしている僕。僕は母を忘れない。きらきらした思い出のまま心に残していく。

本編の文字数

４２８６文字

母と旅と

僕は十歳になるくらいまで旅行というものに対しての概念が、人と大きく異なっていた。

一般的に旅行といえば、非日常を味わうものだと思う。でも僕にとってそれは日常だった。母との生活そのものだった。

別に、特定の家がなかったとか、父がろくでなしな奴だったから逃げ回っていたとか、そういった、のっぴきならない理由があったわけではない。単に母が旅行好きな人で、同じ場所にはいられない人だったのだ。

「ねえ、翔ちゃん。旅行に行こうか」

母はそう言うとすぐに、少し大きめのショルダーバッグに数枚の衣類や化粧品なんかをぽんぽんと適当に詰め込み始める。それからお気に入りだった深茶色のローファーやスニーカーなどの歩きやすい靴を履き、戸締まりの確認を済ませた。荷物は少しばかり多いが、僕にとっては旅行というものが「デパートへ行こうか」とか「少し遠くの公園へ行こうか」的なものと同じ感覚だった。

母は運転があまり得意ではなかったので、移動手段は専ら公共の交通機関だ。最寄りのバス停からバスに乗って駅に行き、電車か新幹線に乗る。大概はその先で数日から数週間程度滞在して家に帰るのだが、さらに空港へと向かうときもあった。飛行機に乗るとなるとかなりの遠出ということになるので、そのときになってようやく僕は「どこに行くの？」と母に聞いたりする。

母は、寒いところよりは暖かいところの方が好きなのだろう。飛行機に乗るときは、九州地方や沖縄が多かった。特に沖縄が好きだったようで、よく訪れていた。

母は南国では殆ど化粧をせずに、たっぷりと日焼け止めを塗り、黒々としたサングラスをかけて、つばの広い帽子を深めに被る。青空のもと、ビーチチェアにゆったりと座る。たまに僕と一緒に浮き輪に入ってプールや海で泳いだりもしたが、大抵の時間はお酒を飲みながら海をぼんやりと見つめていた。正直言って、僕は退屈だった。でも、ひとりでプールや海に入っては絶対にダメだと言われていたので、その時間は母の隣でおとなしく本を読んでいた。宿が貸し出してくれる本は、釣りや魚に関する本が多かったので、おかげで魚類についての知識は、いらないほど豊富になってしまった。

旅行先での宿として大概はリゾートホテルに泊まることが多かったのだが、母の気紛れで時たま民家のような宿に泊まることもあった。民宿というやつだ。そういった宿に泊まると僕は暇ではなくなる。そこでは客同士の距離が近く、なぜか暇を持て余している人たちばかりだったので、僕を構ってくれる大人が多かったからだ。僕もこれ幸いと、その大人たちとお喋りをし、一緒に遊んでもらった。

そんな宿に暫くいると、いつの間にか母には「特別仲の良い男の友人」ができていたりする。僕と遊んでくれる大人の男たちはいつも、母ともよく喋るようになる。多分、最初から母と仲良くなりたいのだろうが、クッション材としてまずは僕が必要だったのだろう。彼らの気持ちは、わからなくもない。僕の母は身内贔屓なお世辞抜きで、とても綺麗な人なのだ。

母は白い肌に手入れの行き届いた黒髪を靡かせて、いつもひらひらと金魚のヒレのようなワンピースを好んで着ているから、スラックスのような格好をした人が多いその宿では、少しだけ浮いている。だからこそ、より目立つ。民宿にいるときの母は少しだけ化粧もしていて、薄く香水を振っていたのか、いつもいい匂いがした。

「おまえのかあちゃん、美人だなあ」

なんて、露骨に言ってくる奴とは、流石に母もあまり仲良くはならなかったけれど、リゾートホテルにいるときとは違い、日に焼けた体格が良い数名の男の人達とお酒を飲み交わして、楽しそうに過ごしていた。

僕も日中は彼らたちと海釣りに行ったり、マングローブでカヌーをしたり街の買い物にも付き添って行けたりしたので、不満はない。「お母さん、素敵な人だよね」とか「綺麗だ」とか、母を褒める言葉を聞くのは僕も気分が良かった。だから母が他の男の人から特別な女性扱いをされているのを見るのも、全く不快ではなかった。母もそういった刺激が欲しくて、そのような宿を敢えて選んでいたのだろう――と僕が気付いたのは、ずっと後になってからだけれど。

そういえば、そんな民宿で出会った母の何人目かの男友達の雅也という人が、知り合いから借りたというボートを沖に出して、僕と母を釣りに連れて行ってくれたことがあった。けれど沖合で突然「結婚してください」と母にプロポーズしていたのは驚いた。雅也はいい人だったけれど、力が強くて少し頭が弱い。無下にしたら浜に戻してくれないのではと、僕は少し怖くなった。波で揺れるボートから見た最寄りの浜には、人影はひとつもない。僕は気持ちを悟られないように、ゆっくりと母の顔を見た。母は、ただ柔く静かに微笑んでいた。そして雅也に「結婚するとどのくらいのお金が必要になるか」を淡々と話していた。そのあいだ雅也は項垂れて泣いていた気がする。謝っていた気もする。とりあえず無事に浜に戻れてよかったと、僕は密かに胸を撫で下ろした。

稀に、北海道や東北地方にも行った。

寒い地方には、あえて真冬に行ったりするので、雪が背丈以上に積もっていて面白かった。豪雪地帯の観光地は雪対策がしっかりとしているので、雪がしんしんと降る日が続いても、歩くのは然程難しくはないのだが、やはり慣れていないこともあり何度か派手に転んで泣いていた記憶もある。母はそんな僕を心配して抱き締めてくれたけれど、盛大に尻餅をつく僕を見て、時に堪えきれず笑ってもいた。

北の地方は食べ物も美味しかった。魚介類は勿論のこと、鹿や鴨肉などのジビエ料理やラム肉など、初めて口にするような物もたくさんあった。ジンギスカンを初めて食べたのも北海道だったので臭みも無く苦手意識は全くなかったけれど、学校の校外学習の昼食で出されたジンギスカンは、とても臭くて食べられたものではなかった。ある意味、同じ肉でもこんなにも違うものか、という衝撃を受けた。やはり食材は、その土地で盛んに作られている物、推している物が一番美味しい。そういった各地域によって変わる特産物とやらを、母と一緒にネットや旅行本で調べながらお店を探すのも面白かった。母は旅先で地元の人と仲良くなるのも得意だったので「観光客が行かない、安くて美味いとっておきのお店」なんかをこっそり教えてもらったりして、隠れご当地グルメを堪能したりもした。

母との旅行は僕にとっての日常だったけれど、母といると刺激的でとても楽しかった。
でも七歳になり、小学生になった僕は母とそんな日々を過ごす為に学校を何日も休まなくてはならず、だいぶ支障が出てきていた。
「あまり学校を休まれると、翔君のためにもなりません」
母は個人懇談で何度か担任の先生にそう言われていた。そう言われると、いつも母は困った顔をして首を捻る。
「そうなんですかねぇ」
と濁してみたりもする。
「翔は学校好き？」
母の質問に僕は頷いた。
「じゃあ、なるべく学校にも行けるようにするね」
そうは言っていたけれど、やっぱり母は変わらなかった。唐突に旅に出たくなる性質は、そう簡単には治らなかったのだ。
それでも母は、僕の為に、頑張っていたのだと思う。しかし努力をしても、ひと月かけていた旅が二週間に、年に二十回の旅が十回になる程度だ。母にとっては、自由に動くことを妨げられるということが何よりも辛かったのだろう。家にいる母の顔に時折、影ができるのを見るのは、僕も気分が良いものではなかった。だからといって「いいよ。好きなところに行こうよ」なんてことを僕も言えない。僕だって友達とも遊びたいし、病気でもないのに学校を休むことが後ろめたく、勉強が遅れてしまうことも嫌だった。
ところで紹介が遅れたが、ろくでなしではない僕の父は、母よりもずっと年上のグレーヘアが良く似合う不動産会社の「社長」だった。母が雅也に論じていたように、妻が好き勝手に、どこへ行ったとしても旅行資金が尽きることがないほどのお金は稼いでいた。
父も仕事であまり家にはいなかったけれど母のことは大好きで、そして父は母のことを大好きだったけれど、僕のことも同じくらい好きでいてくれた。もちろん僕も父のことは大好きだ。
だから父は決断をした。
「これ以上、君の旅に翔を一緒に連れて行かせることはできない」
父は苦虫を噛み潰したような顔をして、ようやく出たと言った言葉を母に伝えた。
「そう……。残念ね。これからは、私だけになるのね」
母が呟いた言葉の意味を、あの時の僕は、すぐには理解できなかったのだけど、父はわかっていたのだろう。
それから母は、すぐにひとりで旅に出た。
とても悲しそうな顔で、僕の頭をゆっくりと撫でてから、大きなスーツケースを持って行ってしまった。
その日。母はバス停からではなくて、知らない男の人が運転する赤い車に乗り込んで出発した。
車は高いヒールの靴を履いた母を乗せて、重低音と共に遠ざかる。
その時に僕はやっと気が付いた。母はもう、戻らない。
「待って！」
重たいエンジン音は、すでに遠くで鳴っている。

僕の叫んだ言葉は、届かない。
「翔、家に入ろう」
落ち着いた声音と共に僕の肩に手をまわした父の目は、はっきりと赤みを帯びている。
いつかはこうなるってわかっていた。僕も父も。
母は同じ場所には、いられない人なのだ。
そう――この家に初めて来た時だって、どこかからの、旅の途中だったのだから。
僕たちはこうして、母を失った。
悲しくないといったら嘘になる。母がいなくなったことは僕の心にとても大きな穴を開けた。
でも不思議だ。母が去った時なぜか、旅が終わり家路についている時に感じていた、安堵を含んだ達成感のようなものを感じていた。
僕の母は「旅」そのもの、だったのだ。

――あれから僕は、同じ場所で同じ人たちと同じような毎日を過ごしている。
美しい海や山、楽しい宴は滅多に見られない。
それでも友達と遊んだり、クラブ活動をしたりして何気ない日常を過ごしているうちに母が開けたその穴は、少しずつ小さくなっていく。
今となってはまるで、母と過ごしたあの日々が幻だったかのようだ。
「楽しい人だったな」
父が呟く。
「うん。テーマパークみたいな人だった」
僕は今でも月に一度だけ母から届くポストカードを壁に貼り、母は今どこでなにをしているのだろうと考えてみる。ポストカードには様々な異国の言葉で「ずっと愛している」と書いてある。
僕も父も、旅する母をずっと愛している。
楽しかったね、という特別な思い出と共に、永遠に、残していく。